



衣川 宣介

『鍋と梵鐘』

江戸期以前において、大鐘の注文を受けながら何度かやりなおした記録をよく見かける。しかし、どのように用立ち申さず、なぜ梵鐘に失敗したかを書いたものは少ない。梵鐘造りを専門にする者を別として、鋳物師たるもの自分が大工として大鐘を鋳ることは、生涯に叶えたい夢であり悲願でもあった。そのため機会があれば己の力量も顧みずに受注して失敗したものが幾つかある。

「竹沢御殿御時鐘之事」より 文政6年(1823)

日頃は鍋を主な製品として製造している鋳物師が鐘の鋳造に挑戦します。その前に鍋と梵鐘の相違点を考えると、鍋は一般的に菜を炊く器具として認識され、2升の水が入る大きさが普通で重さは2~3kgです。耐火粘土で作られた鋳型数個を並べ、甌(こしき)で溶解した銑鉄(ズク)を取鍋(とりべ)に入れて鋳型に鋳込みます。量産品目で毎回同じ物をたくさん作り市場で販売するのです。

一方、梵鐘は受注生産で、大きさ、銘文などと期日を指定され、良い音色のものを作るように注文されます。材質は青銅で、中国の古典「周礼考工記」の『金の六齐』によると、鐘などには錫(すず)14%が良いとされています。そんな材質に関する知識を鋳物師達は持っていたのでしょうか? 梵鐘づくりを伝えてきた鋳物師は親方から材質や梵鐘の部分による厚みの差を流派の教えとして口伝で、竜頭や撞座の文様は木型で伝えたのでしたが、初めて鐘を吹く鋳物師に判るはずもありません。前記では、材料の銅は役所からの支給品で『サルコウベという山出しのままの鈍い銅』と記されています。この銅は『鉄のふしぎ博物館』で展示している真っ赤な銅、自然銅だと思われます。1回目は鐘に大きな穴が開き失敗。頼み込んで再度鋳造『この度の鐘は音声が悪だ悪いから御用に立ちがたい。よって他の鋳物師に申しつける』こんなことになってしまいました。

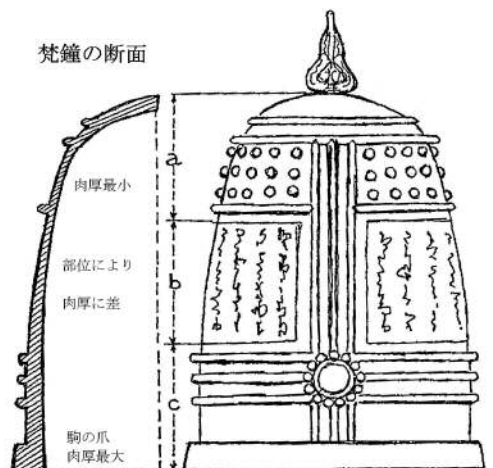
ちなみに、第二次世界大戦で供出された梵鐘の分析値は、地域差があり錫4~9%で平均値は7%。『金の六齐』の半分です。又、江戸時代の梵鐘は余韻が少ないとも言われています。錫の産出量の少なかった我が国では当然かな?

大きな梵鐘を鋳造するためには、大勢の職人達が協働して2~3ヶ以上のコシキ炉で同時に溶銅を流し込む必要があります。そのために銅素材の準備、ふいご(送風機)の調整、など様々な作業が同時進行しないと製品がうまく仕上がらないのです。

鍋を主体にする鋳物師と梵鐘を主にする鋳物師は従業員数、工場規模なども大きく異なっています。姫路の鋳物師、芥田五郎右衛門は傘下に梵鐘の得意な小野家や製塩鍋の製作や塩の流通の得意な田中家他に尾上家などを持つ大きなチームです。



本願寺金澤別院時鐘



梵鐘断面の肉厚



自然銅

参考図書

鋳物師が見た鋳鐘失敗成功の所見 - 「竹沢御殿御時鐘之事」より - 齊藤善夫